

★統計資料案内★

<不 定 期 刊 行 物>

資 料 名	調査年 刊行年	発 行 者	資 料 名	調査年 刊行年	発 行 者
土地・人口			石川 県 統 計 書	35 年	石 川 県
国勢調査結果報告書 (富山県)	35 年	総 理 府 統 計 局	静岡県 の 賃 金 の 動 き	36 年	静 岡 県 統 計 課
〃 (茨城県)	〃	〃	山 梨 県 統 計 書	35 年	山 梨 県
農林水産			横 浜 市 統 計 書	37 年	横 浜 市
農 業 総 合 研 究	37 年	農 林 省 農 業 総 合 研 究 所	県 民 所 得 推 計 報 告	35 年	宮 城 県
農 家 生 計 費 調 査 報 告	35 年	農 林 省 農 林 経 済 局	大 分 県 統 計 年 鑑	36 年	大 分 県
所得税課税農家に関する調査結果	〃	〃	工業開発流通実態調査	35 年	島 根 県 統 計 課
商 工			商業経営実態調査報告書	35 年	〃
機 械 統 計 年 報	36 年	通 産 大 臣 官 房 調 査 統 計 部	統 計 年 鑑	36 年	千 葉 県 統 計 課
経 済			商 業 統 計 調 査 報 告	35 年	東 京 都
国税庁第 86 回統計年報	35 年	国 税 庁	県 民 経 済 計 算 (試 算)	35 年	宮 城 県
県 民 所 得 統 計 資 料	30~ 34 年	経 済 研 究 所 国 民 所 得 部	県 民 所 得 推 計 報 告	35 年	千 葉 県 統 計 課
国民経済計算調査委員会基礎資料	37 年 3 月	〃	〃	35 年	愛 媛 県 統 計 課
割 賦 販 売 実 態 調 査 報 告	37 年 2 月	通 産 大 臣 官 房 調 査 統 計 部	千 葉 県 勢 要 覧	36 年	千 葉 県
消費者動向予測調査	〃	経 済 企 画 庁 調 査 局	岡 山 県 の す が た	37 年	岡 山 県
そ の 他			私 ち だ の く ら し	36 年	静 岡 県 統 計 課
日本標準産業分類適用例	37 年 3 月	行 政 管 理 庁 統 計 基 準 局	東京都標準世帯家計調査	37 年	東 京 都
職 業 名 索 引	〃	〃	農 業 経 済 調 査 結 果 概 要	36 年	群 馬 県 統 計 課
都道府県			岐 阜 県 統 計 書	35 年	岐 阜 県 統 計 課
岡山県市町村勢要覧	36 年	岡 山 県 統 計 協 会	茨 城 教 育 時 報	37 年	茨 城 県 教 育 委 員 会
県 民 所 得 白 書	35 年	山 梨 県 統 計 課	石 岡 市 の 農 業	37 年	石 岡 市
鋳工業生産指数	36 年	愛 媛 県 統 計 課	水 戸 市 勢 要 覧	1962 年	水 戸 市
県 民 所 得 推 計 報 告	35 年	熊 本 県	県 北 地 域 総 合 振 興 計 画	37 年 6 月	県 北 振 興 事 務 所
島 根 の す が た	37 年	島 根 県 統 計 課	土 浦 市 勢 要 覧	1961 年	土 浦 市
消費者物価指数	35 年	〃	市 民 所 得	35 年	土 浦 市 開 発 課
静岡県統計年鑑	35 年	静 岡 県	全 国 道 路 交 通 事 情 調 査 結 果	37 年	茨 城 県 道 路 課
長野県の農林業	1960 年	長 野 県	県 西 地 域 総 合 振 興 計 画	37 年	県 西 振 興 事 務 所
保存簿冊目録	37 年 2 月	滋 賀 県	鹿 行 地 域	〃	鹿 行 〃
県 民 所 得 推 計 報 告	35 年	大 分 県	県 南 地 域	〃	県 南 〃
			茨 城 県 都 市 統 計 書	1961 年	茨 城 県 都 市 統 計 事 務 研 究 会

〈定 期 刊 行 物〉

資 料 名	月号	発 行 者	資 料 名	月号	発 行 者
日 本 統 計 月 報	7	総 理 府 統 計 局	国 土 情 報	4	国 土 計 画 協 会
消 費 者 物 価 指 数	6	〃	科 学 技 術 庁 月 報	8	科 学 技 術 庁
労 働 力 調 査 報 告 (速 報)	6	〃	統 計	6	日 本 統 計 協 会
小 売 物 価 統 計 調 査 報 告	5, 6	〃	統 計 あ お も り	8	青 森 県 統 計 課
労 働 力 調 査 報 告	5	〃	統 計 い わ て	7	岩 手 県 統 計 協 会
人 口 推 計 月 報	4	〃	み や ぎ 統 計	7	宮 城 県 統 計 協 会
家 計 調 査 報 告	1	〃	統 計 秋 田	5	秋 田 県 文 書 統 計 課
通 産 統 計 月 報	7	通 産 大 臣 官 房 調 査 統 計 部	統 計 と ち ぎ	7	栃 木 県
百 貨 店 販 売 統 計 月 報	6	〃	統 計 月 報	7	埼 玉 県 統 計 協 会
出 荷, 在 庫 統 計 速 報	8	〃	統 計 千 葉	7	千 葉 県 統 計 協 会
生 産 統 計 速 報	7	〃	統 計 東 京	8	東 京 都 総 務 局 統 計 部
商 工 統 計 研 究	4	〃	東 京 小 売 物 価 動 向	6	東 京 商 工 会 議 所
織 維 統 計 速 報	6	〃	東 京 卸 売 物 価 動 向	6	〃
紙, パ ル プ 統 計 速 報	6	〃	神 奈 川 の 統 計	8	神 奈 川 県 統 計 協 会
日 用 品, 皮 革 統 計 月 報	5	〃	交 流	6	山 梨 県
ゴ ム 統 計 月 報	5	〃	静 岡 県 の 統 計	6	静 岡 県 統 計 課
窯 業 建 材 統 計 月 報	5	〃	統 計 に い が た	5	新 潟 県 統 計 課
機 械 統 計 月 報	5	〃	統 計 苑	7	岐 阜 県 統 計 課
織 維 統 計 月 報	5	〃	統 計 月 報	5	愛 知 県 統 計 課
商 業 動 態 統 計 速 報	5	〃	京 都 市 統 計 情 報	7	京 都 市 統 計 課
労 働 統 計 調 査 月 報	7	労 働 大 臣 官 房 労 働 統 計 調 査 部	大 阪 の 統 計	5	大 阪 府 統 計 課
労 働 経 済 指 標	6	〃	会 議 所 月 報	7	大 阪 商 工 会 議 所
指 定 統 計 調 整 報 告 届 出 統 計 月 報	6	〃	兵 庫 の 統 計	5	兵 庫 県 統 計 協 会
統 計 情 報	6	〃	統 計 月 報	7	鳥 取 県
教 育 統 計	7	文 部 省 調 査 局 統 計 課	島 根 の 統 計	7	島 根 県 統 計 協 会
郵 政 統 計 月 報	4	郵 政 省	え ひ め の 統 計	7	愛 媛 県 統 計 協 会
運 輸 統 計 季 報	6	運 輸 省	統 計 福 岡	7	福 岡 県 統 計 課
鉄 道 車 両 等 生 産 動 態 統 計 月 報	4	〃	統 計 佐 賀	5	佐 賀 県 統 計 課
建 築 動 態 統 計 月 報	2	建 設 省 計 画 局	統 計 月 報	5	長 崎 県 統 計 課
都 道 府 県 展 望	7	全 国 知 事 会	統 計 宮 崎	6	宮 崎 県 統 計 協 会
経 済 統 計 月 報	6	日 本 銀 行 統 計 局	統 計 鹿 児 島	7	鹿 児 島 県 統 計 協 会
農 林 金 融	7	農 林 中 央 金 庫 調 査 部			

農業就業人口の減少と 農産物の生産構成の変化

いままでお話ししましたように、農業就業人口の減少と
ならんで、農業近代化の契機となるのは国民生活の向上
によつておこる農産物の需要の変化であります。

従来わが国の農業生産をささえてきたものは米と麦と
であります。つまり、このような農産物を生産するのに
農業は労働集約的な栽培方法を取り、労働生産性を高める
よりむしろ土地生産性の向上を基調としておりました。
これは、資本不足の零細な農耕に適した経営方法とい
うことが出来ますが、しかし、将来国民の所得水準の
上昇につれて需要が増大すると考えられる。

農産物は畜産、果実等であつて、このような農産物は
資本集約的な経営によつて成立つものであるところから

第1表 主要農産物需要見通し (単位千トン)

項 目	31~33年平均	45 年
米	12,057	13,235
小 麦	3,560	3,867
大 裸 麦	2,950	2,370
甘 し よ	6,557	7,058
馬 鈴 し よ	3,144	3,724
大 豆	1,253	2,718
そ さ い	8,509	10,443
果 実	2,434	7,973
肉	343	1,300
卵	397	1,144
牛 乳 乳 製 品	1,571	9,389
油 脂	682	1,704
砂 糖	1,463	2,661
魚 貝	4,874	8,477

こういつた問題が農業近代化の一つの契機とされてお
ります。

第1表は倍增計画の昭和45年度の需要見通しであり
ますが、この表は1人当り所得上昇率と需要に対する所得
弾性値(注)を用いて算定したものに将来の総人口を乗じ
て計測したものです。

(注) 所得の一定割合の変化が必要に引き起す変化の
割合で、式であらわすと

$$\text{需要に対する所得弾性値} = \frac{\text{需要の増分}}{\text{需要の大きさ}} \div \frac{\text{所得の増分}}{\text{所得の大きさ}}$$

ます。

需要に対する所得弾性値の差異というのは、所得の
一定の増加割合に対して、第1次産業部門の生産物
に対する需要の増加割合、第2次産業部門の生産物
に対する需要の増加割合、第3次産業部門のサービ
スに対する需要の増加割合に大小の差があるとい
う意味です。

この表をみてわかりますように、肉、牛乳、乳製品
および卵などの畜産物、それから果実および油脂等の伸
びはいずれも基準年次に比べて2倍以上の増加が見込
まれます。特に牛乳、乳製品は約5倍という著しい増加
が見込まれ、肉などはこれについて3倍以上になる見込
みであります。

またこのほかに、砂糖、魚介類、大豆などの需要の増
加が期待されておりますが、米、馬鈴しよ、そさい等は
横ばいの状態です。

ここで、最近のわが国における需要の面についてふれ
てみましょう。

(第2表)

一人当り主食消費量

(単位1年あたりkg)

年 度	昭 和 26年度	27	28	29	30	31	32	33	34	35
米	99.3	102.4	100.3	99.3	110.6	111.5	115.8	112.8	115.0	114.3
米以外の穀物 (1)	48.2	46.7	43.3	45.3	44.6	40.9	40.8	39.1	35.9	35.2
穀類の合計	147.5	149.1	143.6	144.6	155.2	152.4	156.6	151.9	150.9	149.5
い も 類 (2)	40.0	49.2	38.6	39.4	48.7	45.7	43.3	41.9	37.4	34.0

備考 1 本表は「エコノミスト」7月10日号による

2 (1)は小麦、大麦、裸麦、雑穀の合計

3 (2)は甘しよ、馬鈴しよの合計

このことは第2表のように、米の一人当り消費量は最近までのところそれほど減つてはおりません。これは、所得水準が上つたために麦類や雑穀の消費量が減り、これが米に変わつてきているためと思われます。

つまり、米、麦、雑穀などを合計した主食の一人当りの消費量は昭和30年から昭和32年ごろがピークであつてその後次第に減つてきております。

また、麦類、雑穀類の一人当り消費量は昭和30年ごろから急速に減つてきており、その分だけ麦から米への消費の転換があつて、米の消費量が長期的に減る傾向を隠す形になつていたのだと思ひます。

また、最近になつて、物価値上りの関係で、パン、麵類の価格が上つたので、代替効果が生じ、米の需要が若干増加している傾向があります。それと、所得が増加する結果として、所得効果による麦類から米への転換が見られるわけです。

このような需要の見通しによつて、将来の生産方向を考えるわけでありますが、この倍増計画では、需要の増大する農産物はなんでもかんでも国内で増産するんだという立場をとつておりません。

このことは、経営合理性を尊重し、農業資本の適正配分ということを考えますと当然なことでありましよう。

(第3表) 主要農産物の生産見通し

項 目	作 付 面 積 (1,000ha)		反 収		生 産 量 (1,000t)	
	32 年	45 年	32 年	45 年	32 年	45 年
米	3,265	3,234	石 2.37	石 2.73	11,472	13,236
小 麦	643	458	1.59	1.82	1,396	1,143
大 麦	425	359	2.40	2.84	1,110	1,107
裸 麦	520	349	1.46	1.70	1,056	823
甘 し よ	370	297	kg 1,752	kg 2,195	6,482	6,519
馬 鈴 し よ	207	222	1,492	1,791	3,088	3,976
大 豆	352	250	117	165	412	412
そ さ い	535	602	1,544	1,613	8,260	9,710
果 実	214	366	1,062	1,452	2,273	5,314
な た ね	229	180	119	167	273	304
て ん さ い	32	113	2,494	2,858	798	3,230

(備考) 32年の数値は、実績ではなく、25年～33年すう勢線上の32年値である。

したがつて、需要があつても国際的に割高のもの、たとえば小麦などは輸入する方向に重点を置いたり、国内農産物価格を高める可能性のあるもの、たとえば、大豆などは増産より生産性の向上に重点を置くといった具合に立案された主要農産物の生産見通しが第3表であります。

このような生産方向を反映して、将来における農業の部門別構成は変化して、耕種部門の比重が現状の84%か

ら69%に低下すま。また、畜産部門においては、14%から30%と大きくその比重が増大します。そして、こういつた生産を総合した農業の成長率は年率2.9%となり、特に畜産においては9.3%と著しく高くなります。

このようなことは、現在の農業経営が、だんだん西欧型有畜経営に転換していくということで、日本農業の新しい道が開けることでもありましよう。

市 町 村 の 横 顔

旭 村

概 況

本村は茨城県の東南部にあり東北は大洗町、西北は茨城町、西南は鉾田町にそれぞれ接して、東は太平洋に面している。昭和29年12月26日に夏海、大谷、諏訪三村の対等合併の協議が成立し、翌30年3月3日併合して総面積54.5km²の旭村が発足した。



村の北部には水戸八景の一つ「広浦の月」で有名な溜沼がある。面積11.1km²周囲23.9kmの湖沼で、日曜、祭日には海の幸、川の幸を求めて遠く東京方面からも釣天狗がやってくる。

役場へは茨城交通鉾田行のバスに乗って1時間で子生弁天につく、ここでバスを降り徒歩で約20分ほどで、まだ建築されたばかりの役場につく、役場前を通るバスはスクールバス兼用の乗合が朝ター一回だけで、ちよつと不便なところにある。

昭和35年の国勢調査によると、村の世帯数は2,030、人口は11,747人でうち男5,671人、女6,076人で、昭和30年に対して641人の減少を示している。

2 産 業

総人口のうち52.7%の6,195人は就業人口で、このうち5,484人は農林業就業者で就業人口の88.5%にあたる。これをみてもわかるようにこの村の産業といえはまず農業というほかあるまい。1960年の世界農林業センサスの結果によれば、農家総数は1,761戸で経営耕地面積2,395ヘクタールで、経営耕地面積広狭別では1~1.5ヘクタールが452戸1.5~2.0ヘクタールが421戸で最も多い。

農作物の主なものは、夏作では甘藷で収穫面積1,123ヘクタール、収穫量30,350t、それにらつかせい、陸稲などである。冬作物では大麦、小麦、ビール麦などの麦類がそのほとんどで、これらの収穫面積は1,580ヘクタール、収穫量4,600tに及んでいる。鹿島地方で有名なすいかは販売農家14戸と僅かであるが、反当り収入は10万円という農作物の中では、たばこと並んで、相当に収益のある作物である。

現在農村における問題として、生産性の向上と年々減少して行く労働人口とがあり、これらを解決するために為政者は各般にわたり一連の施策を計画実施している。

この村でも、機械力の導入を図り作業を能率的に行ない労働力人口の不足を補うため、農地集団化事業が推進されており、昭和35年度には対象面積400ヘクタールのうち83ヘクタールの交換が行なわれ、集団化率20.8%の成績をあげ、このため一戸当りの通作距離も交換前の4,241mから3,725mとなった。このように農地の集団化を行なう一方、農業経営面では養豚、乳牛を中心とした酪農経営へと移行しようとしており、昭和37年~39年の継続事業として東部地区400ヘクタールを対象に養豚と中心とした酪農経営のパイロット地区として農林省から指定されておりその成果が期待されている。

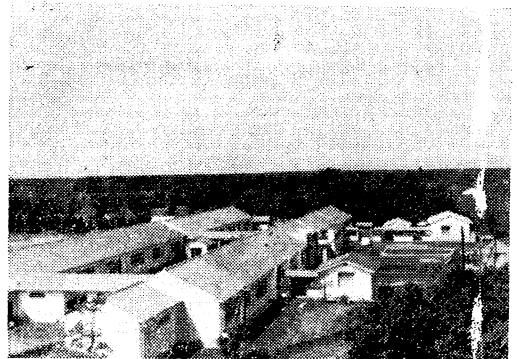
3 教育文化

県下でも有数のマンモス中学校として昭和37年4月に大谷、子生、諏訪、沢尻の各中学校を統合して旭中学校の誕生をみた。約1万坪の校地に木造瓦葺平家建926坪の校舎が建っており、工事は35年4月に着工し、37年8月に完成し工事費3千5百万円を要した。

中学校の生徒数は約1千人で、一学級平均48人、教員1人当り生徒数は32人と比較的恵まれた環境にある。

小学校は本校が5校、分校が2校で児童数約2千人で教員1人当り児童数では諏訪小学校の17人から飯田分校の42人と割合に少ない。

テレビの普及状況は37年3月末現在で、305台普及率15.0%で県平均の40.5%をかなり下回っている。しかし今後の農業経営の改善合理化にともない、農家の経済状態もよくなり、ますます普及するであろう。また将来は鹿島灘沿岸臨海工業地帯の造成によつて、この地方も近郊農村として大いに発展することが期待されよう。



(旭 中 学 校)



人間雑話 (5)

茨城大学教授 塚本勝義

夏目漱石は、人間がパンにそこなわれることを怖れた。そして、パンにそこなわれていない、人間そのものの実態を見究めようとした。「それから」の主人公長井代助などはその好典型だ。

パンから切り離して人間を考える——古くさい人間探求のように思う人もあろう。社会的存在である人間を無視した非科学的思考だときめつけなくなる人もあろう。現に批評家と称する専門家の中にさえ、前近代的探求として、おとしめようとする者もある。

しかし漱石は、人間の社会性を見忘れて人間探求を試みたわけではない。それどころか、ろくでもない社会性をうんざりするほど背負い込んで、あつぶあつぶしている人間のみじめさに気づいたからこそ、もう一度人間そのものを、しつかと捉えようとしたわけだ。悪しき社会性を誰よりもくわしく知り、鋭く感受したから、その悪しき社会性を除去するために、人間性の本質を再確認しようとした。そうして、捉えた人間の本質を基点として悪しき社会性の是正をもくろんだのが漱石の本当の腹であつた。漱石文学を前近代的だなんて評する人の頭がおかしい。読みこなしていない。徒らに社会性を連呼し、本格的思索を怠つている、いわゆる新人連中こそ前近代性をしこたま持つてるといえそうだ。

腹が減ると盗み食いする。金がないとかつばらう。重要な地位にすわると、むしように気取り出す。夫になると細君を馬鹿よばりし、妻の座につくと夫がガラクタに見えてくる。有名な会社に就職すると同窓がコケに感じられてくる。二三十年も親爺をつとめると、生まれたときから親爺だつたように錯覚する。おふくろの場合だつて全く同じ。娘時代には見知らぬ男からラブレターを恵まれ胸をとどろかした思い出もあるくせに、娘のところに来た恋文を発見すると、筑波山でも爆発したようなたまげ方をする。

わたくしのように永いこと教員をやつてると、目つきは勿論のこと、歩き振りから咳払いまで教員じみているらしい。役人生活だつて恩給のつく頃には、役人根性と称する嫌味たつぷりの鼻もちならぬ根性もできかねない。水筒売の女性なんか、ちらりと見ただけではつきり判るほど一種の型ができ上がる。

みんな悪しき社会性の表われだ。たしかに社会性だ。

しかし悪しき社会性だ。社会性だからといって、放任しておくことはできない。腹が減つても、つまみぐいしない人間に仕上げなければならぬ。金がなくともかつ払いしない人間にする必要がある。教員根性・役人根性をたたきつぶして、本来の人間根性にきたえ直さなければならない。

この大仕事を敢行するためには「本来の人間根性」を明確に捉えるのが第一歩だ。漱石文学の中味は、この第一歩の仕事だつた。悪しき社会の改造のための文学だつたのである。

薄給の勤人がごまかしでもやつたとする。すぐ給料が少いからだと割り切つてしまう。安月給のためだけだつたら、本年採用の新社員は揃つてごまかしをやるはずだし、部長や社長は絶対に刑務所なんかへ飛び込まぬはずだ。

知識は必要だ。だが、馬鹿の一つ覚えは危険だ。ところが現代日本には到るところに馬鹿の一つ覚えのさばつてようだ。大学のようなところにも、左翼ばつたことをしやべつて進歩的ゼスチャーだと心得る時代おくれも跡を絶たぬという。だから、口先左翼で、ふところは資本主義といった珍無類の人間像も浮かび上がる。

やたらに知識をつめ込んで、まとまりを失い、いわゆる自己分裂に陥るのは悲劇だ。馬鹿の一つ覚えで、たつた一つの公式、たつた一つのひがんだ知識に有頂天になつてるのは喜劇だ。

もしも人間が社会的存在でなかつたら、自己分裂の悲劇も自己陶醉喜劇も、その被害は、その演出者だけに限定される。しかるに人間は社会的存在だ。みんなつながつて生きてる。被害は波紋のようにひろがる。特に指導的立場にある人間ほど悪しき波紋が大きく、しかも深くひろげて行く。

どんな会社に入つた若者でも、一度はたまげる。この驚きは、焼きのまわつた機構に対する人間的批判なんだ。それこそ貴重な驚きだ。機構を若返らせるためには大いに重視しなければならない。会社でも役所でも事情にかわりはないはず。同じ人間の寄り合いなんだから。